専修人文論集97号
319-334, 2015

ジョイス文学の原点としての「小さな雲」

小田井　勝彦*

はじめに

イギリスで出版社を営むグラント・リチャーズとの間で、いくつかの表現をめぐる印刷業者の削除要求などにより『ダブリナーズ』の出版交渉が難航し、代わりに『室内楽』の出版を先に行なう話が持ち上がっていた時期である1906年10月18日付の弟スタニスロース宛ての手紙で、ジョイスは次の様に述べている。

> It is impossible for me to write anything in my present circumstances. I wrote some notes for *A Painful Case* but I hardly think the subject is worth treating at much length. The fact is, my imagination is starved at present. I went through my entire book of verses mentally on receipt of Symon's letter and they nearly all seemed to me poor and trivial : some phrases and lines pleased me and no more. A page of *A Little Cloud* gives me more pleasure than all my verses.
>
> (*Letters* *II* , 182)

＊専修大学法学部兼任講師

この一節から「小さな雲」（“A Little Cloud”）が『ダブリナーズ』の中でもジョイス自身のお気に入りの作品であることが窺える。しかし、『ダブリナーズ』の出版交渉も難航し、「現在の環境で僕が何か書くことは不可能です」と弱音を吐露せざるをえないような苦境にあったジョイスが、「小さな雲」に喜びを見いだしているのはなぜだろうか。本稿では、ジョイスが「小さな雲」に喜びを見いだしていた理由を検証することにする。

ジョイスの分身チャンドラー

『若い芸術家の肖像』（以下『肖像』とする）、『ユリシーズ』のスティーブン・ディーダラスはもちろんのこと、「死者たち」のゲイブリエル、『フィネガンズ・ウェイク』のシェムなど、ジョイスの作品に登場する人物たちの中には、ジョイス自身の自伝的事実が反映されている人物が多く存在する。「小さな雲」の主人公チャンドラーもそんな人物のひとりである。

「小さな雲」は1906年初めに書かれた作品である。その前年７月にトリエステのジョイス家では長男ジョルジオが誕生し、家の中には四六時中泣き叫ぶ赤ん坊がいたことになる。また、この創作時期には、ベルリッツ校での英語教師としての仕事の負担が増大し、引っ越しなども行なっていたため、「小さな雲」の創作スピードは遅かったとロバート・E・スプーは述べている（Spoo, 402）。経済的にも困窮し、生活費を稼ぐための日々の仕事に追われ、帰宅しても落ち着いて創作活動に勤しむことができる状態ではなかったのである。

さらに、リチャード・エルマンによる伝記は、1905年12月４日付のジョゼフィン叔母さん宛ての以下の手紙を引用し、この時期にノラとの夫婦の危機が生じていたと述べている。

I have hesitated before telling you that I imagine the present relations between Nora and myself are about to suffer some alteration. I do so now only because I have reflected that you [are] a person who is not likely to discuss the matter with others. It is possible that I am partly to blame if such a change as I think I foresee takes place but it will hardly take place through my fault alone. I daresay I am a difficult person for any woman to put up with but on the other hand I have no intention of changing. Nora does not seem to make much difference between me and the rest of the men she has known and I can hardly believe that she is justified in this. I am not a very domestic animal — after all, I suppose I am an artist — and sometimes when I think of the free and happy life which I have（or had）every talent to live I am in a fit of despair. At the same time I do not wish to rival the atrocities of the average husband and I shall wait till I see my way more clearly. I suppose you will shake your head now over my coldness of heart which is probably only an unjust name for a certain perspicacity of temper or mind. I am not sure that the thousands of households which are with difficulty held together by memories of dead sentiments have much right to reproach me with inhumanity. To tell me the truth in spite of my apparent selfishness I am a little weary of making allowances for people.　（*Letters* *II*, 128–129　下線筆者）

「小さな雲」の終盤でチャンドラーは、妻へのプレゼントとして青いブラウスを買ってきたエピソードを思い出し、夫婦が幸せだった頃を回想するが、これは上記のジョイスの手紙における「死せる感情の記憶」にあてはまりそうである。そして、幸せだった頃を回想していながら、写真の妻の目を見つめて、「なぜ写真の中の目と結婚してしまったのか。」（“Why was

it so unconscious and lady-like?”）（*Dubliners*, 83）と結婚を後悔し、「小さな家から逃れることはできないだろうか。ギャラハーのように勇敢に生きるには遅すぎるのか。ロンドンに行くことはできないのだろうか。」（“Could he not escape from his little house? Could he go to London?”）（*Dubliners*, 83）と自問するチャンドラーは、「ときどき、ぼくに可能であり、可能であったはずの自由で幸福な人生を思うと、絶望に駆られます。」と叔母への手紙に書いたジョイスの姿に重なる。このように考察すると、「小さな雲」は結婚の危機を迎えていたジョイスの家庭生活をまさに映し出しているのである。

そして、叔母への手紙でジョイスは自らを芸術家であると定義している。しかしながら、リチャーズが1906年２月にいったん出版を了承したものの、度重なる削除要請など出版交渉が難航し、結局出版の話は同年９月に白紙に戻ってしまう。芸術家として生計を立てることができるかどうかの瀬戸際に立たされており、この時期のジョイスは立場的には芸術家志望の英語教師にすぎないと言っても過言ではない。「小さな雲」は、まさにリチャーズとの出版交渉に暗雲が垂れ込め、自身の将来の展望に対して心理的に不安定な時期に書かれたものである。

チャンドラーも芸術家を志している。ジョン・ゴードンは、気象現象の「雲」が吸収、凝結、蒸留、発散という過程を経るのと同様に、グラタン橋から見た街並みを見て「詩的な瞬間」（“a poetic moment”）（*Dubliners*, 73）が訪れ、その場面で吸収したイメージを基に熟考して表現しようとするチャンドラーが詩作を試みる過程を描いたものであるという分析を行なっている。

ゴードンは次のように述べている。

> In the course of the story Chandler finds himself wanting to be a poet of a certain type, which can be described with some precision because

> "A Little Cloud" acts it out. From Chandler's point of view, in fact, were he allowed to complete the story whose hero he would be, the main narrative thread would probably be about the poem not written, the poem that in the course of the evening was conceived, pondered, nurtured, matured, brought to the verge of fulfillment, then cruelly aborted in the glare and blare of his home. Considering the similarities in their respective compositions, real and envisioned, this poem might have resembled Stephen's villanelle (although it would probably have soft-pedaled the eroticism). It would have been the work of a "sensitive nature" (D, 80) whose finely-balanced "equipoise" registered fleeting sensations and transfused them into an inner repository that then imbued them, over time, with the gentle melancholy of its native spirit. (We may glimpse, behind this portrait, the James Joyce of Dubliners, balefully surveying the James Joyce of Chamber Music).
> (Gordon, 36–37)

すなわちゴードンは、『肖像』の第５章で「誘惑者のヴィラネル」をスティーブンが創作する過程と類似し、それはジョイス自身の創作過程と同様であると示唆し、吸収、凝結、蒸留、発散というパターンはその後の作品で繰り返し登場し、「小さな雲」はその原型であるとしている。

このゴードンの著作（2004年）の３年前、マーガレット・マクブライドは、スティーブンによって『ユリシーズ』の第７挿話で披露される「ピスガ山からパレスチナを見る、またはプラムの寓話」、第９挿話で披露されるシェイクスピア論を分析し、物語を作る想像力の源となるわずかな手掛かりだけをもとに、ほとんどゼロの状態から物語を想像するのがスティーブンおよびジョイスの創作方法だと述べ、さらにはスティーブンがその日のブルームとの出会いをきっかけにして『ユリシーズ』を創作したという

奇抜な論を展開している。ゴードンの論はマクブライドの論に繋がるものであり、吸収、凝結、蒸留、発散というパターンは、ジョイス作品で繰り返し登場するパターンであることが裏付けられていると言ってよい。

これまで考察してきたように、家庭生活の面でも、芸術面でも、チャンドラーは「小さな雲」を創作していた当時のジョイスの面影を保持しており、まさにジョイスの分身であると言えよう。自らの悲劇的な状況を作品につぎ込み、その作品を自ら読むことで、ジョイス自身には悲しみに浸るカタルシス効果を持っていたであろう。しかしながら、カタルシス効果というだけでは、スタニスロースの手紙に書かれた「喜び」を説明することはできない。

反面教師チャンドラー

当然のことながら、『肖像』、『ユリシーズ』のスティーブンはジョイスと同一ではない。自らの自伝的事実を重ね合わせながらも、語り手を巧みに操り、自嘲や皮肉を込めて造形した登場人物のひとりにすぎない。「小さな雲」の主人公チャンドラーも同様である。前節ではジョイス自身の伝記的事実がどのようにチャンドラーに反映されてはいるかを辿ってきたが、この節ではジョイスがどのように皮肉を込めてチャンドラーという人物を造形したかを考察していきたい。

この作品は自由間接話法を使用し、主人公チャンドラーの視点から描かれているが、決してチャンドラーに同情的に語られているわけではない。マーゴット・ノリスは、「かなり歪んだ語りによる操作」(“highly perverse narrative manipulation”)（Norris, 110）が行なわれていると指摘している。彼女は、会話の場面でギャラハーがチャンドラーのことを「トミー」(“Tommy”）と呼んでいることに注目し、「小さなチャンドラー」という

呼び名は、本人のいないところで使われているあだ名のようなものであり、実際には身長は「平均よりわずかに小さい」（“slightly under the average stature”）（*Dubliners*, 70）だけであるのに「小さな男」というイメージを付与しているのだとしている。つまり、語り手と読者は、「この男（チャンドラー）に不利となるゴシップ」（“unkind gossip about this man”）（Norris, 111）をしていることになり、ギャラハーが優位に立っているように思えるのは、「語りと読者による判断の共謀」（“performative collusion of narration and readerly judgement”）（Norris, 110）によって生み出される考えであるというのである。

多くの批評家が指摘しているように、チャンドラーとギャラハーのふたりは対照的に描かれている。チャンドラーが人生の落伍者であると仮定するならば、ギャラハーは成功者と仮定される。しかしながら、ギャラハーはおそらくチャンドラーが想像している通り、著名人のスキャンダルやゴシップを扱うような「低俗なジャーナリズム」（“tawdry journalism”）（*Dubliners*, 80）に従事しており、

> —It pulls you down, he said. Press life. Always hurry and scurry, looking for copy and sometimes not finding it: and then, always to have something new in your stuff. Damn proofs and printers, I say, for a few days. （*Dubliners*, 75）

とギャラハーによって語られる仕事の様子から考えると、ギャラハーはあくまでも使用人の身分であり、華やかな成功者のイメージはない。また、

> He was beginning to feel somewhat disillusioned. Gallaher's accent and way of expressing himself did not please him. There was something vulgar in his friend which he had not observed before.

（*Dubliners*, 76–77）

とチャンドラーはギャラハーを観察しているが、上記引用中の“Damn”や「奴は落ちぶれた」（“He’s gone to the dogs”）（*Dubliners*, 75）、「やばいぜ、お前みたいな敬虔な奴向きじゃないけどな」（“Hot stuff! Not for a pious chap like you, Tommy.”）（*Dubliners*, 76）のような言葉使いは下品であると考察でき、ギャラハーに対するチャンドラーの判断は正しいと言える。言葉使いが階級を表すものであるとするならば、ギャラハーは成功どころか落ちぶれているとさえ言えるのである。しかしながら、ノリスが指摘する「かなり歪んだ語りによる操作」によって、ギャラハーを優位に立たせることによって、チャンドラーは自分には不相応な夢を思い描き、友人を嫉妬し、自ら置かれた環境のせいにする無能な人物として造形されているのである。

そして、ゴードンがチャンドラーの「思考は曇っていると呼ぶことができるだろう」（“those thoughts could well be called cloudy.”）（Gordon, 33）と述べているが、チャンドラーの意識の流れは彼自身の自己弁護を読者に提示するものではなく、むしろ彼の無能さを浮き彫りにしている。ウォレン・ベックは、詩人になるという空想にひたっていることによって彼自身は文学的素材から遮断されていると述べている。彼は例として、職場であるキングス・インを出たところで遭遇する「垢で汚れた子供たちの集団」（“A horde of grimy children”）（*Dubliners*, 71）に何の思考も与えていないこと、かつては貴族が住み、様々な歴史的変遷があるヘンリエッタ通りの家々の「過去の記憶に何の感情もない」（“No memory of the past touched him,”）（*Dubliners*, 72）こと、自宅でのシーンで読むバイロンの詩がいかに人工的な言い回しに溢れていて酷い詩であるかにチャンドラーが気づいていないことを挙げている。（Beck, 165–166, 175–176）

また、チャンドラーがイギリスの批評家によって自らの詩集が賞賛され

ている様子を想像している次の一節

> The English critics, perhaps, would recognise him as one of the Celtic school by reason of the melancholy tone of his poems ; besides that, he would put in allusions. He began to invent sentences and phrases from the notice which his book would get. *Mr. Chandler has the gift of easy and graceful verse.... A wistful sadness pervades these poems.... The Celtic note*. （*Dubliners*, 74）

に関して、ノリスは

> Clearly Thomas Chandler is here satirized as a poetaster, a poet manqué, an effete and solipsistic romanticist — perhaps enfolded in Joyce's greater critique of the Celtic revival's futile aesthetic escapism （"That they may dream their dreamy dreams / I carry off their filthy streams"）. （Norris, 112）

と述べている。ノリスは括弧の中でジョイスの風刺詩「ザホーリーオフィス」の一節を引き合いに出しながら、アイルランドの現実には目を向けず、美学へと逃避しているとジョイスが批判するケルティック・リバイバル派の姿を、チャンドラーの思考の中に読みとっているのである。

チャンドラーは、前節で検証したようにジョイスの分身としての特徴を持ちつつも、それとは逆にジョイスが否定するケルティック・リバイバル派の文学者たちの特徴をも内包しているのである。スティーブンやジョイス自身と同じ創作方法を取ろうとしつつもチャンドラーが詩を完成させることができないのは、周囲の現実を直視することができず、ケルティック・リバイバル派が行なっていることを目指そうとする態度のためであるか

もしれない。

これまで、語り手のチャンドラーに対する態度、そして語り手によって語られる彼の思考の内容から、主人公の人物造形がどうのように行なわれているかを考察した。最後に角度を変えて、作者ジョイスがチャンドラーをどのように位置づけているかを考察しておきたい。ジョイスがこの作品を創作した時は24歳であったが、チャンドラーの設定を32歳としている。38歳のレオポルド・ブルームほど歳を取っているわけではないが、詩人として成功を収めるには遅すぎる年齢であり、芸術家として認められなかった場合のジョイス自身の将来の姿であると言ってもよいであろう。

また、この作品は、後から書き加えられた作品であり、「死者たち」を書く前の14番目に書かれたものである。その作品がすでに完成していた「下宿屋」と「対応」の間に配置したことは示唆的である。「下宿屋」では、ドランがムーニー夫人の巧みな戦略により、娘のポリーとの結婚を迫られ、結婚を承諾させられる。その次の作品である「小さな雲」では、チャンドラーは結婚して一年半経ち、結婚生活に不満を抱いている。『ダブリナーズ』を「姉妹」から順番に読み進めている読者が、ドランのその後の姿がチャンドラーであり、チャンドラーのその後の姿が「対応」に登場するファリントンであると想像することは容易であろうと思われる。つまり、チャンドラーが発作的に赤ん坊に怒鳴り声をあげる姿は、アルコールの力を借りて妻子に暴力を振るうファリントンの前触れであると考えることが可能である。さらには、暴力を振るうことで家から追い出されてしまったムーニーが、ファリントンの将来の姿であると推測することも可能であろう。

先に引用したジョゼフィン叔母への手紙の中で「並みの亭主の残酷さと張り合うつもりもないので、もっとはっきりと道が見えてくるまで待つでしょう。」（*Letters* Ⅱ, 129）とジョイスは書いているが、妻子に暴力を振るうファリントンの姿は、ジョイスが決して望まない自らの将来の姿であろう。

これまで考察してきたように、主人公チャンドラーはジョイス自身の自伝的事実を担いながらも、ジョイスが否定するケルティック・リバイバル派の目標を掲げる芸術家のなれそこないであり、不相応な夢を思い描き、友人を嫉妬し、自ら置かれた環境のせいにする無能な人物として描かれている。チャンドラーの人物像は、ジョイスにとってなんとしても回避したい反面教師像であり、そうあるべきではない芸術家像を風刺的に描くことによって、ジョイス自らが目指す芸術を宣言していると言える。

しかしながら、ここでひとつ疑問が浮かぶ。ケルティック・リバイバル派を批判し、自らの目指す芸術を宣言することが目標であるなら、チャンドラーを無能な男として描く必要があったのだろうか。チャンドラーを自らの分身として擁護し、同情的に描くことの方が効果的ではないだろうか。チャンドラーを無能な男として描きたいことがあったはずである。

ジョイスの創作姿勢の変化

1905年初め、ジョイス一家はポーラからトリエステへ移動する。南国の美しさは、彼の師であるイプセンと同様に、ジョイスの創作にも大きな影響を与えた。エルマンは次の様に記述している。

> The south had a similar effect upon Joyce ; slowly, in spite of many flare-ups, his anger cooled, his political ideas, at first assertive, almost vanished, his literary aim shifted imperceptibly from exposure to revelation of his countryman ; he applied himself to creating a subtle and elaborate art, less incriminating, more urban than the chapters of *Stephen Hero* or the early stories of *Dubliners*.
>
> （Ellmann, 196　下線筆者）

『ダブリナーズ』の初期に書かれた作品は、リチャーズへの手紙に書かれ、これまで数多く引用されてきた一節にあるように、精神的麻痺とか罪といったものを「暴露」(“exposure”) し、「アイルランド人が私の良く磨かれた姿見鏡で彼ら自身をしっかり見ること」(“the Irish people from having one good look at themselves in my nicely polished looking-glass”) (*Letters* *I*, 64) を促し、アイルランドの「精神的解放への最初の一歩」(“the first step towards the spiritual liberation of my country”) (*L I*, 63) が創作の意図であったのであろう。一方で、「小さな雲」も含む後期に書かれた作品は「顕わし出すこと」(“revelation”) にあった。“revelation” には、「天啓」、「黙示」の意味もあり、この時期にジョイスの芸術の根幹をなす「エピファニー」にたどり着いたということができるであろう。

それでは、「小さな雲」の内容面において、何を「顕わし出すこと」をジョイスは意図していたのであろうか。スプーは、ジョイスが1905年から1906年にかけてグリエルモ・フェレーロの『若きヨーロッパ』を熟読しており、「小さな雲」のタイトルをジョイスはそこから得たとしている。スプーによると、『若きヨーロッパ』の主題は「知ることはないだろう」(“Ignorabimus”) であり、永遠に対する人間の未来予定のはかなさを語っており、「人間が実現不可能な考えのために熱心に取り組んだ後での実用主義的な諦観の気持ち」が「死者たち」の基本的な進展であり、「小さな雲」においてもそれは共通のテーマであると述べている。そして、人間は無にすぎないという諦観は、「小さな雲」のチャンドラーに始まり、「すべての生者死者」に混ざっていく「死者たち」のゲイブリエル、『ユリシーズ』のブルーム、『フィネガンズ・ウェイク』の HCE、ALP へと繋がっていくことをスプーは示唆している。(Spoo, 401–408)

チャンドラーは、元々「運命に抗うのはいかに無益かと感じていた。これは年月が彼に教えた知恵の重みであった」(“He felt how useless it was to struggle against fortune, this being the burden of wisdom which the ages

had bequeathed to him.”）（*Dubliners*, 74）のように考えていた。しかしながらこの作品の舞台となる日、7年ぶりに旧友ギャラハーと会うことで舞い上がり、無能な男が詩人として成功をするという実現不可能な野望を抱く。ギャラハーに対して不信感を抱き、「結婚の至福の喜び」（“the joys of connubial bliss”）（*Dubliners*, 78）を否定するギャラハーの発言に対して「首を振る」（“shook his head”）ことにより、無言で抗議を示す。（*Dubliners*, 81）

その時点でチャンドラーは現実へと立ち返るかというとそうではない。ノリスは、チャンドラーが「この時点で自分のものとなったギャラハーの卑しむべき価値観を持って帰宅し、それらを家族や家庭生活に向ける」（“Chandler returns to his home with Gallaher’s despicable values now internalized and trains them upon his family and his domestic life.”）と述べており（Norris, 118）、さらにカーシュナーは死んだ恋人を詠うバイロンの詩を読みながら、自分の妻が死んでいることを想像しており、妻が駆け込んできても誰が入ってきたのか分からないのだとまで分析している（Kershner, 100）。いずれにしても帰宅後もギャラハーの影響下にあることは確かである。「首を振る」ことで示されたようにギャラハーの人間性を否定しつつも、「なんらかの方法で自分の正当性を証明し、自らの男性性を主張する」（“to vindicate himself in some way, to assert his manhood”.）（*Dubliners*, 80）ことを目論み、泣き始めた赤ん坊を抱えながらもバイロンの詩を読みつづけようとしているのかもしれない。ギャラハーと違って自分が恵まれていないのは環境のせいであると考え、苛立つチャンドラーは、赤ん坊に対して大声を発してしまうのである。

それでは、この作品におけるクライマックスはどこにあるのだろうか。それはやはり、多くの批評家たちが指摘しているように、チャンドラーが「後悔の涙」（“tears of remorse”）を流す場面となるだろう。大声を出したことで赤ん坊は「泣きじゃくりの発作」（“a paroxysm of sobbing”）を起

こし、死んでしまうのではないかとチャンドラーは不安になり、駆け込んできた妻の「憎悪」(“the hatred”)の眼差しにあう。(*Dubliners*, 85)この日チャンドラーがプレゼントした青いブラウスを着ているかどうかは作品中不明であるが、青い服を着て赤ん坊を抱く姿は、聖母マリアとキリストのイメージであるとする研究者も多くいる。これこそは、まさに天啓、エピファニーであり、チャンドラーが現実に立ち返るのはこの時点である。

チャンドラーが流す「後悔の涙」に関しても多くの解釈があるが、このように作品を辿ってくるとベックの解釈が最適なものであるように思える。彼は、彼の恥とは粗雑な幻想が現実を消し去り、彼の感情的な空想やギャラハーの粗野な大柄な態度が彼と健全さの間に侵入することを許してしまったことであるとしている。(Beck, 181)そして、そのことに対して「後悔の涙」を流し、通常の「運命に抗うのは無益」という諦観の境地に戻るのである。

この作品が最終的に目指していることは、ジョイス自身の悲劇を暴いてみせることでも、自らの芸術宣言をすることでもない。自らの自伝的事実を主人公に与えつつも、実現不可能な夢を思い描くどこにでもいるような無能な男性像を提示することで、運命には抗うことができない人間の悲劇を「顕わし出すこと」に成功しているのである。

おわりに

本稿の冒頭に掲載したスタニスロースへの手紙の続きには次のように述べられている。

> I am glad the verses are to be published because they are a record of my past but I regret that years are going over and that I cannot follow

the road of speculation which often opens before me. I think I have unlearned a great deal but I am sure I have also a great deal to learn. Your opinion of me seems to be steadily rising again : but, after all, to say that I am not a vulgar mountebank like most of the 'artists' of Ireland is little. What really is the point is : whether it is possible for me to combine the exercise of my art with a reasonably happy life.

（*Letters II* , 182　下線筆者）

チャンドラーが「後悔の涙」を流した後、「結婚の至福の喜び」を取り戻すことができるのかどうかは不明のまま作品は終わっている。しかし、諦観の境地に戻ったチャンドラーが、「そこそこ幸せな生活」を見いだすことができるとしたら、家庭生活に他ならず、最後の場面はその可能性を提示しているように思える。

ジョイスの後期の作品の登場人物たちは悲劇に満ちている。『ユリシーズ』の主人公ブルームは、息子を亡くし、妻とはセックスレスで、しかもその妻は不倫をしている。『フィネガンズ・ウエイク』の HCE と ALP は、人類の全歴史の悲劇を担っている。彼らは、抗うことができない運命に対して諦観の境地に至っている。しかしながら、彼らは決して悲劇的ではなく、生の喜びに満ちている。そのようなジョイスの文学作品の原点となっているのは、フェレーロの『若きヨーロッパ』からアイデアを得た「小さな雲」であるといえよう。

最後に、本稿の最初で提示した問いに戻りたい。ジョイス自身が「小さな雲」を読み直した時に得る喜びは、自分が生涯にわたって描くべきテーマを見出した喜びであり、ダブリン市民の生態を「暴露すること」から、全人類に共通の悲劇や生の喜びを「顕わし出すこと」へと、自らが作家として成長したことに対して喜びを感じていたと推測できるのではないだろうか。

参考文献

Ellmann, Richard. *James Joyce*. 2nd ed. New York : Oxford University Press, 1982.

Gordon, John, *Joyce and Reality : The Empirical Strikes Back*. New York : Syracuse UP, 2004

Joyce, James, *Letters of James Joyce*, II. Ed. Richard Ellmann. New York : Viking, 1966.

Joyce, James, *Dubliners : Text and Criticism Edited by Robert Scholes and A. Walton Litz* New York : Penguin Books USA Inc., 1996

Kershner, R. B. *Joyce, Bakhtin, and Popular Literature : Chronicles of Disorder*. Chapel Hill and London : The University of North Carolina Press, (1989).

McBride, Margaret, *Ulysses and the Metamorphosis of Stephen Dedalus*, Lewisburg : Bucknell UP (2001)

Norris, Margot, *Suspicious Readings of Joyce's* Dubliners. Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 2003.

Spoo, Robert E. " 'Una Piccola Nuvoletta' : Ferrero's Young Europe and Joyce's Mature *Dubliners Stories*" JJQ 24–4 (1987) : 401–410

Tindall, William York. *A Reader's Guide to James Joyce*. New York : Octagon Books, 1959.

辻弘子『ダブリン市民と聖書のイメージ』東京：音羽書房鶴見書店，2001